石川看護研究会　Journal of Ishikawa Society of Nursing Research, Vol.13, No.1, pp.41～44, 2000.

論　　文

卒後１年目の看護婦がもつ成長欲求

黒田　清美・新谷　圭子[*1]・酒井　陽子[*2]
酒野　小百合[*3]・稲垣　美智子[*4]

辰口芳珠記念病院　[*1]金沢社会保険看護専門学校
[*2]国立金沢病院附属金沢看護学校　[*3]浅ノ川総合病院　[*4]金沢大学医学部保健学科

Nurses' Desires for Self-development in the First Year from Graduation

Kiyomi Kuroda, Keiko Shintani[*1], Yoko Sakai[*2], Sayuri Sakano[*3] and Michiko Inagaki[*4]

Tatsunokuchi Houju Memorial General Hospital
[*1]Kanazawa Social Insurance Nursing School
[*2]National Kanazawa Hospital Kanazawa School of Nursing
[*3]Asanogawa General Hospital
[*4]School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Kanazawa University

Abstract

Last few years, we have faced with the necessity of some educational programs for graduated nurses. The purpose of this research was to disclose rookies' zeal in the first year "the desires for self-development" in order to make us to develop the certain training curriculums for them as the first step. We approached 8 nurses who were interviewed by semi-structual-interview method and analyzed them through qualitative-induction-method.

As a result of categorizing the contents of textual analests, the extracted category which was related to "the desires for self-development" was the acquisition of ideal nursing skills which their own appropriate personality should have.

We found four desires for self-development, that were the possession of essential affection which was projected onto ideal nurse, the sufficient nursing time for the patient, the acquision of basic wisdom for dicison-making, and the attempt to brekethrough the anxiety of unfamilior fields.

In addition, we found three features which were related to the desires for self-development, that were the responsibility for fatal jobs, the desire for self recognition, and the pleasure of nursing.

Key Words

graduated nurses, the desires for self-development, educational programs for graduated nurses

要　　旨

近年，新人への卒後教育のあり方を考える必要性に迫られている。本研究は「成長欲求」を踏まえた新人看護婦教育カリキュラム作成のための一段階として，卒後1年目の看護婦の「成長欲求」を明らかにすることを目的とした。方法は，8名の新人看護婦を対象に，半構成的面接法を用いた質的帰納的方法とした。

逐語録にした内容の意味を記述しカテゴリー化した結果，成長欲求として抽出されたカテゴリーは，個々がありたいと思う看護婦像であった。その性質から，理想とする看護者に投影された本質的な優しさ，患者との濃厚なかかわり，判断力の基盤となる知識，未経験から生じる不安への挑戦が，修得したい内容として見出された。

また成長欲求には，命に関わることへの責任，他者から認められる存在になりたいという希望，看護する喜びが関連していた。

キーワード

新人看護婦，成長欲求，新人教育

はじめに

近年，新人看護婦の看護実践力や人間関係能力の欠如，あるいは主体的に行動するのではなく指示されたことに従う傾向（指示待ち傾向）などが指摘されており[1]，新人への卒後教育のあり方を考える必要性に迫られている。既存の新人教育に関する研究は，現場への適応状況や知識・技術についての教育プログラム評価など，教育する側のニーズに関連するものが多く[2-5]，学習者のニーズに焦点を当てたもの，中でも教育の根幹ともいえる学習者の「成長欲求」について研究されたものは皆無である。

本研究は，誰でもが持つといわれる「成長欲求」を踏まえた新人看護婦教育カリキュラム作成のための一段階として，卒後1年目の看護婦の「成長欲求」を明らかにした。

＜用語の定義＞

成長欲求とは，自己実現を目標にして，内面からわき上がってくる，こうなりたい，こうしたいと思う欲求のこととした。

方　　法

人間は変化する環境と絶えず影響しあいながら成長する存在であることから，個人の内発的な成長欲求を，周囲の環境との相互作用とその解釈過程をとおしてとらえることが可能であると考え，質的帰納的方法とした。

1．対象：研究者が所属する石川県内の総合病院に勤務している卒後1年目の看護婦8名であり，年齢は21～22歳であった。調査時期は1998年11月であり，対象には研究の主旨と方法を説明し，同意を得た。

表1　面接者の背景

		出身学校	所属	年齢
施設A	A子	3年課程看護学校	整形外科	21歳
	B子	3年課程看護学校	神経内科	21歳
施設B	C子	3年課程看護学校	内科	21歳
	D子	3年課程看護学校	外科	21歳
施設C	E子	3年課程看護学校	整形外科，内科 泌尿器科	21歳
	F子	医療短期大学	内科	21歳
施設D	G子	3年課程看護学校	放射線科，内科 皮膚科	21歳
	H子	3年課程看護学校	内科	21歳

2．調査方法：半構成的面接法を用いた。面接項目の設定，面接方法は以下のとおりである。

1）面接項目の設定方法：学習者の成長欲求を知るためにはどのような要素が必要かを研究者が出し合いそれをK－J法を用いて9項目にした。9項目とは①目標・理想，②勉強したいこと，③身につけたい技術・態度，④自信のあること，⑤自信のないこと，⑥楽しみ，⑦感動，⑧大切なもの，⑨将来のビジョンであった。

2）面接方法：面接項目（9項目）に従い研究者は必要な項目を話すきっかけを作ること，課題から大きくそれないことに注意し，対象が自由に

語ることができる雰囲気づくりの配慮をした。一人あたり30〜60分間の1回の面接であり，面接場面は承諾を得て録音した。

3．データー分析方法：逐語録にした内容を文節に分けその意味を記述しカテゴリー化した。

結　果

1．成長欲求として抽出されたカテゴリー

成長欲求は次のような内容の修得を意味しており，それは個々がありたいと思う看護婦像であった。修得したい内容としては，<理想とする看護者に投影された本質的な優しさ>，<患者との濃厚なかかわり>，<判断力の基盤となる知識>，<未経験から生じる不安への挑戦>の4つが見出された。

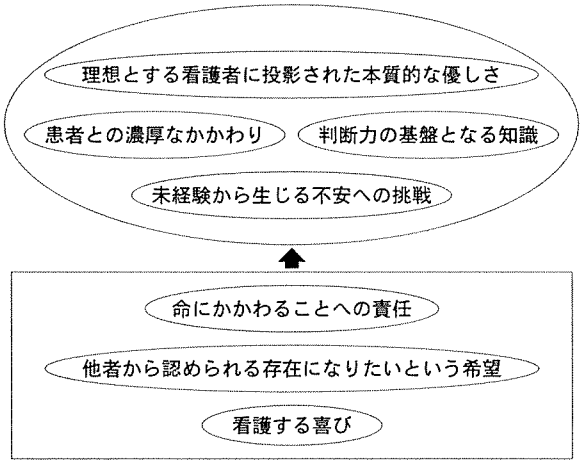

図1　成長欲求の概念構造

1）理想とする看護者に投影された本質的な優しさ

マザーテレサに憧れます。人間が生きていく上で基本的なふれあいや人と人との関わりについて教えてくれた人だから。（E子）

普段は目立たなくて弱々しく感じる人だけれど本質的な人としての優しさがある○さんが目標です。相手のために時間をおしまない1対1の関わりを大事にしている人です。（G子）

新人看護婦は患者に対して向けられる優しさがあらわれている看護婦の姿を話した。それは患者への対応場面における看護婦の優しさというより現実に存在するある特定の「理想とする看護婦がもつ特性」をあげ，その個人がもつ本質的な優しさに投影されるものであった。

2）患者との濃厚なかかわり

ゆっくりと患者さんと話している時の自分が好き。忙しい時や，ついバタバタするときは，患者さんにも伝わってしまう。手術の患者さんをどうしても優先しなければならず，変化の少ない人が手薄になる。その人たちにもゆっくりと対応したいのだけれど……ジレンマがありますね。（A子）

自分の理想が実践できなくてイライラします。看護学校で学んだ，相手のことを第一に優先させることが理想の看護であり，それを実践しようにもできにくい環境だなと思う。（B子）

基礎教育で体験されたものが看護として価値づけられており，その価値はもっと濃厚な患者との関わりを希望するものとして表現された。

3）判断力の基盤となる知識の修得

解剖生理とかもう少し勉強しておけばよかったと思う。手術後の患者さんに対してどうしてこのことが起こっているのかなとかアセスメントができない。でも清潔援助とかは症状や障害に応じて自分でどんな方法がいいのか判断して援助できるようになったのが嬉しい。（A子）

相手が今必要としているときにその時に対応できる人になりたい。知識をたくさんもっていて，それを援助に生かせる人に憧れます。（C子）

解剖学・生理学の知識で看護に活用された実感をもつ知識のことである。一人での行動が安心してできるようになるために必要な力と価値づけていた。

4）未経験から生じる不安への挑戦

たまにポツポツしかない検査や処置が自信ない。突然に検査とかが入ると忘れていて思い出しながらしなくてはいけないのでドキドキしたり戸惑ってしまう。それと救急蘇生も急変にあったことがないんでどうしたらいいかわからない。急変したときを想定して本を読んだりしている。検査は何回もついて覚えたい。（A子）

経験しないとわからないからと不安な状態だが，未経験のものに対して自分なりの対応策をたてて，今後起こりうる事態に対応しようとしている状態のことである。

2．関連因子

成長欲求に関連するものとして，<命に関わることへの責任>，<他者から認められる存在への希望>，<看護する喜び>の3つのカテゴリーが見出された。

1）命に関わることへの責任

直接生命に関わることに対しては怖い。救急時にはどうしたらいいのかと思う。血液をみないこと，患者さんが痛くないことに対しては自信がもてたんだけど……心電図も読めるようになりたい。人工呼吸器，心カテにつくときなんか一番緊張。責任のある仕事だと思う。（F子）

直接生命に関係するという責任感が，緊急時の対応への緊張感として表現された。

2）他者から認められる存在になりたいという希望

患者さんが退院されるとき，『あんたが一番話を聞いてくれた』と言ってくれたとき，自分も大事な存在になれたと思えて嬉しかった。（G子）

スタッフと気軽に話したい。もっと自分の思っていることを素直に出せたらいいなと思う。先輩に気にかけてもらえると頑張ろうと思う。（H子）

患者やスタッフに認めてもらった経験が新人看護婦を励ましており，周囲の要求にも答えようとしていた。

3）看護する喜び

感動したのは意識障害のある患者さんが入浴によって，どんどん反応がでてきたこと。少しでも患者さんに喜んでもらえたら，嬉しい。（H子）

嬉しかったことや感動を述べるとき，患者との体験を表現することが多かった。

成長欲求は，これら3つの関連因子が存在して，生じるものであった。

考　察

人間は，生涯にわたって成長し続ける存在であると言われている。したがってどの年代においてもあるいはどのような経験においても，その時々の成長欲求があることが，予測される。

本研究から，新人の成長欲求は，理想とする看護婦像や患者に対して力になりたいという思いなど，他者の影響を受けて存在する構造が見出された。そのため新人教育の内容には，看護に活用された実感のもてる実践的知識の提供や，モデルとなる人的環境の整備，基礎教育で体験され価値づけられたような納得のいく看護体験が必要であり，それらが成長欲求の充足に関与することが示唆された。

一方，命にかかわることの責任や看護する喜び，あるいは他者から認められる存在になりたいという希望が成長欲求に関連していたが，これらはいずれも過度であれば緊張状態を意味するものであった。成長欲求そのものは，他者との関係から自分の理想が「自分」の中でかたち作られたものであり，さらにそれは緊張を伴った専門家としての課題を自己に課しながら，存在するのではないかと考察された。

本研究は，新人ではない人との比較，人数などカテゴリーの精選の段階に限界がある。しかし学習する側の成長過程に着眼し，成長欲求と新人教育とを結びつけ概念化したことにより，新人の特性を把握する上で有意義な結果といえる。

ま と め

1．新人看護婦のもつ成長欲求は，理想とする看護者に投影された本質的な優しさ，患者との濃厚な関わり，判断力の基盤となる知識，未経験から生じる不安への挑戦という内容の修得であった。

2．成長欲求は命に関わることへの責任，他者から認められる存在になりたいという希望，看護する喜びに関連していた。

付　記

本研究は，平成9～11年度石川看護研究会研究活動推進事業，看護教育部において助成を受けたものである。

文　献

1）堀喜久子：学生の気持ちを理解するために必要なこと，看護教育，35(6)，415－418，1994
2）堀百合子，他：新カリキュラム卒業生の職場への適応過程，第27回日本看護学会集録（看護教育），52－55，1996
3）長谷川真美，他：看護実践能力の発達と指導のあり方についての検討－卒業後3年間の傾向－，第24回日本看護学会集録（看護管理），13－16，1993
4）榎田守子，他：卒業時と卒後1年次の自己評価からみた技術教育の評価，第25回日本看護学会集録（看護教育），78－80，1994
5）姫野憲子，他：新卒看護婦の看護行動習得過程と課題，第23回日本看護学会集録（看護教育），179－182，1992